

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
応用数学	平成28年度	島田祐一	3	後期	履修単位1	必

[授業のねらい]

1階微分方程式と2階微分方程式を学習する。微分方程式の解法は工学にとって必須のものであり、道具として自由に使いこなせるようになることを目標とする。今まで学んできた微分積分学の生きた知識が要求されるので、講義の際に確認していきたい。

[授業の内容]

この授業の内容は全て学習・教育到達目標(B)〈基礎〉に相当する項目である。

第1週 微分方程式の例と考え方  
 第2週 変数分離形の微分方程式の解法  
 第3週 同次形の微分方程式の解法  
 第4週 1階線形微分方程式の解法（一般解の導出とその適用）  
 第5週 1階線形微分方程式の解法（定数変化法による解法）  
 第6週 完全微分方程式の解法  
 第7週 1階線形微分方程式の工学問題への応用  
 第8週 中間試験

第9週 中間試験の解説，2階微分方程式への導入  
 第10週 2階線形微分方程式の例，1階線形微分方程式になおす方法（ $y$ を含まない場合，変数 $x$ を含まない場合）  
 第11週 定数係数2階線形微分方程式の解法（一般解の導出）  
 第12週 定数係数2階線形微分方程式の解法（演習）  
 第13週 定数係数2階線形微分方程式の特殊解の求め方  
 第14週 2階微分方程式の初期値問題と境界値問題  
 第15週 2階微分方程式の工学問題への応用

[この授業で習得する「知識・能力」]

1. 次の概念が理解できる。： 微分方程式，変数分離形微分方程式，同次形微分方程式，1階線形微分方程式，完全形微分方程式，2階線形微分方程式  
 2. 変数分離形の微分方程式が解ける。  
 3. 同次形の微分方程式が解ける。  
 4. 1階線形微分方程式が定数変化法を用いて解ける。

5. 完全形微分方程式が解ける。  
 6. 2階微分方程式を1階微分方程式になおす方法により，解ける。  
 7. 定数係数2階同次線形微分方程式が解ける。  
 8. 定数係数2階線形微分方程式が解ける。

[この授業の達成目標]

工学の諸問題で数式化された微分方程式の中で，解が容易に見出される非常に重要な1階および2階の微分方程式を解くことができる。

[達成目標の評価方法と基準]

上記「知識・能力」1～8の習得の割合を，中間試験，期末試験，レポートにより評価する。達成度評価における「知識・能力」の重みは，1の概念を理解した上で，2～8を同じとする。各試験において，合計点の60%の得点で，目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。

[注意事項] 微積分のあらゆる知識を使うので，低学年で学んだことの復習を十分にすること。疑問が生じたら直ちに質問すること。本教科は後に学習する応用数学，数学特講，の基礎となる科目である。

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 微積分の全ての知識。その他，低学年の数学の授業で学んだこと。

[レポート等] 理解を深めるため，演習課題を与える。

教科書：「高専の数学3」田代・難波 編（森北出版）

参考書：「新編 高専の数学3 問題集」田代 編（森北出版）

[学業成績の評価方法および評価基準]

後期中間・学年末の2回の試験結果を90%，レポートを10%として評価する。ただし，後期中間試験において，60点に達しない場合，平均点の半分以上の学生についてはそれを補うための再試験を実施し，再試験の成績が中間試験の成績を上回った場合には，60点を上限として試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。学年末試験の再試験は行わない。

[単位修得要件]

学業成績で60点以上を取得すること。

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
応用物理	平成28年度	田村陽次郎・丹波之宏	3	通年	履修単位2	必

[ 授業のねらい ]

物理学は工学全般を学ぶ上で最も重要な基礎科目である。物理学の本質を捉えるためには、数学に基づいて論理的に構成された理論の構築と、その実験的検証が必要である。

この授業では、第2学年に引き続き高等学校程度の物理学を学ぶ。物理の問題を自分で考えて解く力を養うと同時に、実験において物理学のいくつかのテーマを取り上げ、体験を通して自然界の法則を学ぶことを目的とする。

[ 授業の内容 ]

前・後期とも、第1週～第15週の内容はすべて学習・教育到達目標(B)<基礎>に相当する。

前期(丹波・田村)

第1週 実験ガイダンス, 実験テーマ解説

第2週から第12週までは下記の5テーマの実験をグループ別に行う。

1. 分光計: 精密な角度測定器の分光計を用いて、ガラスの屈折率を求める。
2. レーザー光による光の干渉: 光の重要な性質である干渉・回折を、レーザー光を用いて観察する。
3. 直線電流のまわりの磁界: 直線電流の周りにできる磁界の大きさを測定し、地磁気の水平分力を計算する。
4. 電子の比電荷( $e/m$ )の測定: 電子の基本的定数をデモ用の装置を用いて測定する。
5. 等電位線: 様々な条件の下で生じる電界の等電位線を描き、電界の様子を調べる。

以下は「物理」の教科書を中心に学ぶ(田村)

第13週 電流とキャリア, 電気抵抗

第14週 電力とジュール熱, 電位降下, 抵抗の接続

第15週 電池の起電力と内部抵抗, キルヒホッフの法則

後期(田村)

第1週 電流が磁界から受ける力

第2週 ローレンツ力

第3週 電磁誘導の法則

第4週 磁界中を運動する導体の棒

第5週 自己誘導と相互誘導

第6週 交流, 交流の実効値

第7週 コンデンサーやコイルを流れる交流

第8週 後期中間試験

第9週 電気振動, 共振, 電磁波

第10週 電子の電荷と質量

第11週 光の粒子性

第12週 X線の発見, X線スペクトル, X線の波動性

第13週 X線の粒子性, 粒子の波動性

第14週 原子モデル

第15週 放射線と原子核, 原子核とエネルギー

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
応用物理（つづき）	平成28年度	田村陽次郎・丹波之宏	3	通年	履修単位2	必

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 実験を通して、基本的な機器の使い方を習得しており、自分の力で実験を進めることができ、かつ実験内容の把握とその結果について分析し、レポートにまとめることができる。</p> <p>2. オームの法則および抵抗の特徴を理解し、関連する計算ができる。</p> <p>3. 直流回路の特徴を理解し、関連する計算ができる。</p> <p>4. 磁界や、電流のつくる磁界に関する計算ができる。</p>	<p>5. 電流が磁界から受ける力に関する計算ができる。</p> <p>6. ローレンツ力に関連する計算ができる。</p> <p>7. 電磁誘導を理解し、関連する計算ができる。</p> <p>8. 自己誘導・相互誘導を理解し、関連する計算ができる。</p> <p>9. 交流を理解し、関連する計算ができる。</p> <p>10. 電磁波に関する基本的な知識を有している。</p> <p>11. 電子の電荷と質量について理解できる。</p> <p>12. 光やX線、物質波の特徴について理解できる。</p> <p>13. 原子モデルや原子核に関する基本的な知識を有している。</p> <p>14. 「物理」で学んだ内容に関する初歩的な問題が解ける。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>電磁気学および電子の発見から前期量子論に至るまでの理論の基本的な内容を理解し、関連する基本的な計算ができ、与えられた課題に関しては実験を遂行した上で適切にレポートをまとめることができる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」2～13を網羅した問題を1回の中間試験、1回の定期試験および宿題で出題し、14については学習到達度試験、1については実験状況の視察およびレポートによって目標の達成度を評価する。達成度評価における各「知識・能力」の重みは、1が30%、14が20%、残り50%の評価は2～13において概ね均等とする。試験問題のレベルは高等学校程度である。評価結果が60点以上の場合に目標の達成とする。</p>
<p>[注意事項]</p> <p>物理においては、これまでに習得した知識・能力を基盤とした上でしか新しい知識・能力は身に付かない。試験が終わっても習得した知識・能力を忘れずに、毎回の授業等で与えられる宿題やレポートは確実にこなして、新しい知識・能力を確かなものにする。本教科は後に学習する応用物理の基礎となる教科である。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>第2学年までに習った物理および数学(とりわけベクトル,三角関数),およびレポート作成に必要な一般的国語能力を必要とする。本授業科目は第1・2学年時に履修する「物理」の学習が基礎となる授業科目である。</p>	
<p>[レポート等] 実験に関しては毎回レポートの提出を求める。講義に関しては、演習課題を課す。</p>	
<p>教科書: 「物理」(啓林館), 「物理・応用物理実験」(鈴鹿工業高等専門学校 理科教室編)</p> <p>参考書: 「フォローアップドリル物理」(数研出版), 「センサー総合物理」(啓林館)</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>講義: 後期中間, 学年末の2回の試験及び学習到達度試験に, 演習課題の評価(10%以下)を加えて, それを平均化したものを学業成績の総合評価とする。再試験は行わない。</p> <p>実験: 提出されたレポートに関して100点を満点として評価する。</p> <p>講義による評価を70%(後期中間・学年末50%, 学習到達度試験20%(演習課題はこれらに含まれる)), 実験による評価を30%という配分で総合評価したものを学業成績とする。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
総合実習	平成28年度	佐脇・白井・鬼頭	3	通年	履修単位4	必

[ 授業のねらい ]

より良い製品作りは製品の機能や性能だけではなく、仕様決定から製品の廃棄までの全過程を意識して行う必要がある。総合実習では機械技術者にとって基本である“ 構想、設計 / 製図、加工 / 組立 / 調整、改善 ”の一連の「ものづくり」のプロセスを全て体験することで、機械工学の専門科目、実社会での設計 / 生産技術、研究活動に活用できる技術とセンスを磨き、計画立案・実行力を養成する。

[ 授業の内容 ]

手動操作の有線リモコン式ロボットを設計 / 製作する。製作するロボットはサイズおよび重量の制限を設ける。動力は7.2[V]および3[V]の直流電源（バッテリー）とし、モータ、歯車、ベアリング、アルミ材など、必須な材料は支給する。アイデアを図面に表し、設計・製作し、学年末の授業でコンテストを実施する。クラスを8班に分けて各班で1台のロボットを製作する。並行してNC加工機の実習を行う。

各班にリーダーを1名決める。各班員はリーダーの指示に従い、協力してロボットの設計、製図、製作を行う。ロボット設計に先立ち、まず各班に支給する家電製品を徹底的に分解する。市販の製品の仕組みを理解し、自らのロボット開発に生かす。毎週の授業ごとに班内で話し合ったこと、実際に行なった作業、発生した問題とその対策などを工作実習報告書に執筆して決められた提出期限内に提出する。決められた日までに設計図面（アイデア、組立図、部品図）を完成させて班員全員で教員に対して報告を行い、許可を得てから次のステップに移行する。

課題説明とアイデア検討

第1週～第4週

学習・教育到達目標（A）＜視野＞

学習・教育到達目標（A）＜技術者倫理＞

学習・教育到達目標（A）＜意欲＞

学習・教育到達目標（B）＜専門＞

第1週（ガイダンス）：製作する競技ロボットのルールおよび使用可能な材料と工具の説明、実習工場内の作業に関する安全教育を行なう。ロボットのアイデアを各人で考える。考えた結果は第3週の授業開始時にレポート提出すること。

第2週～第3週（家電製品の分解）：各班に1台ずつ配布する家電製品を班員全員で協力して分解し、仕組みを理解する。

第4週（ロボットのアイデア決定）：第3週に回収したロボットアイデアのレポートを各班に戻す。班内でディスカッションしてアイデアを一つにまとめ上げる。

第5週以降は、

(a) ロボット設計 / 製作（17週）

(b) NC加工機実習（5週）

を行う。

NC加工機（NCフライス / 小型マシニングセンタ）

学習・教育到達目標（B）＜基礎＞

学習・教育到達目標（B）＜展開＞

第5週 NC加工機の構造と原理の説明、NC言語の講義

第6週 NCフライスの課題プログラムの作成、入力、オフラインでの確認

第7週 NCフライスによる加工実習

第8週 小型マシニングセンタの課題プログラムの作成、入力、オフラインでの確認

第9週 小型マシニングセンタの加工実習

ロボットの設計 / 製作

学習・教育到達目標（B）＜基礎＞

学習・教育到達目標（B）＜専門＞

学習・教育到達目標（B）＜展開＞

第10週 構想設計プレゼンテーション

第11週～第16週 設計・製図（組立図、部品図）

第17週～第28週 部品加工・組立・調整

(1) アイデアの決定

(2) 構想設計

(3) 組立図作成

(4) 部品図作成

の各段階で指導教員のチェックを受け、合格した班のみ次の作業に移る。部品図作成が完了した班のみ、実習工場に移動してロボット製作に取り掛かることができる。

発表および報告書作成

学習・教育到達目標（C）＜発表＞

第29週 発表会（競技会）

第30週 報告書作成

(次ページにつづく)

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
総合実習(つづき)	平成28年度	佐脇・白井・鬼頭	3	通年	履修単位4	必

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>NC加工機(NCフライス/小型マシニングセンタ)</p> <p>学習・教育到達目標(B)&lt;基礎&gt;,&lt;展開&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>NC加工機の原理が説明できる。</li> <li>NC言語の基本的な記述ルールを理解できる。</li> <li>実習時間内に与えられた課題NCプログラムを完成できる。</li> <li>作成したNCプログラムを加工機に読み込ませ、実際に加工作業を行える。</li> </ol> <p>ロボットの設計/製作/発表</p> <p>学習・教育到達目標(B)&lt;基礎&gt;,&lt;展開&gt;,(C)&lt;発表&gt;</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>ロボットのアイデアを積極的に提案し、活発に議論できる。</li> <li>アイデアを実現するメカニズムを考案し、図面化できる。</li> <li>与えられた制限(サイズ,重量,材料)を考慮に入れてロボット各部の寸法を計算できる。</li> <li>ロボット全体の組立図,部品図を製図できる。</li> <li>旋盤,ボール盤,フライス盤,帯ノコ盤など,必要な加工機を正しく安全に用いて部品を加工できる。</li> <li>スイッチを用いたDCモータの正逆回転回路を理解できる。</li> <li>実習内容を簡潔かつ正確に工作実習報告書に記述できる。</li> <li>製作したロボットの構造,特徴,長所と短所を簡潔かつ正確にプレゼンテーションできる。</li> <li>計画にしたがって作業を行うことができる。</li> </ol>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>アイデアの創出と討論,加工法を考慮した設計図の作図,工作機械の正しい使用方法の習得,計画立案および実行力とプレゼンテーションといった一連の「ものづくり」のプロセスに必要な知識と経験を身に付け,実際にオリジナルのロボットをチーム一丸となって製作できる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1~13の習得の度合いを毎週提出する工作実習報告書および学年末に提出する最終報告書,中間報告と最終的に完成した成果物(ロボット)で評価する。達成度評価における各「知識・能力」の重みは同じである。満点の60%の得点で,目標の達成を確認する。</p>
<p>[注意事項]</p> <p>総合実習は1,2学年で学んだ工作実習の応用である。ロボット製作は創意,工夫,チームワークが重要となるため,授業の欠席や遅刻はチームワークを乱し,他の班員へ負担を強いることとなるため厳に慎むこと。工作実習報告書の提出期限は厳守,授業を欠席した場合であっても必ず提出期限までに提出すること。授業内で講義する安全管理を守ること。出図日は厳守すること。</p> <p>本教科は後に学習する「創造工学」,「工学実験」,「卒業研究」,「特別研究(専攻科)」の基礎となる教科である。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>本教科は1,2学年の「機械工作実習」,「設計製図」,「機械工作法」の学習が基礎となる教科である。これらの授業を十分理解していること。歯車の種類,ギア比とトルク/回転速度の関係を理解していること。</p>	
<p>[レポート等]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>毎週,実習内容および製作中のロボットの問題点やその解決法,参考書などで調べた内容を工作実習報告書にまとめ,提出する。</li> <li>製作したロボットに関する最終報告書を一人一部ずつ作成し,学年末に提出する。</li> <li>設計中のロボットに関するプレゼンテーション(1名ずつ)を指導教員に対して行なうので十分な発表準備を行なうこと。</li> </ul>	
<p>参考書:1,2学年「機械工作法」の教科書</p> <p>「楽しい競技ロボットの作り方」(弓納持,日刊工業新聞社),「ロボコン・ベーシック・スタディ」(清水,オーム社)など。</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>授業毎に提出する工作実習報告書の記述内容を提出毎にA~Eの5段階で評価し,その平均点を工作実習報告書の評価 <math>a</math> (100点満点),学年末に提出する最終報告書の評価点を <math>b</math> (100点満点)とする。工作実習報告書の提出遅れ点 <math>c</math> は1日あたり1点を減点(1提出あたり3点を上限,通年で15点を上限)する。欠席点 <math>d</math> は授業を休んだ場合は1日あたり5点,遅刻・早退は1点を減点する(通年で15点を上限)。中間報告,製作したロボットの評価(競技結果・プレゼンテーション),各学生の貢献度合に応じて評価点 <math>e</math> (最大15点)を加える。学年末以外は <math>a - c - d</math> を学業成績の評価とする。学年末は <math>(a \cdot 0.6) + (b \cdot 0.25) - c - d + e</math> を学業成績の評価とする。ここで <math>a, c, d</math> は各期の評価ではなく,授業開始時(4月)から成績評価時までの評価の平均とする。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
機械工学演習	平成28年度	民秋・鬼頭・南部・埜	3	通年	履修単位2	必

[ 授業のねらい ]

基礎的な数学だけでなく本年度に習得する科目の理解を深め、種々の知識を活用して様々な場面で出会う問題の解決に結びつけるためには、未知の問題に取り組むことにより、自ら解を導く体験が重要である。本演習では、1, 2 学年で習得した数学（三角関数、指数関数、対数関数、高次方程式・不等式、因数分解、微積分）や本年度習得する機械運動学、材料力学、熱流体工学基礎の基本的な考え方を説明し、小テスト形式で行う演習問題を解き進めていくことにより各科目の理解を深め、現象を整理する上での数学の重要性を学ぶと同時に、現象の背景にある物理的本質を見極める能力を身に付ける。

[ 授業の内容 ]

本授業の各項目は、すべて学習・教育到達目標 (B) <専門>に相当している。

前期

- 第1週 基礎数学（指数関数）
- 第2週 基礎数学（対数関数）
- 第3週 基礎数学（三角関数）
- 第4週 基礎数学（高次方程式・不等式）
- 第5週 基礎数学（因数分解）
- 第6週 数学（積分）
- 第7週 数学（微分）
- 第8週 前期中間試験
- 第9週 中間試験の解説および解答
- 第10週 機械運動学（力とモーメント）
- 第11週 材料力学（応力とひずみ）
- 第12週 材料力学（引張りと圧縮）
- 第13週 機械運動学（分布力）
- 第14週 機械運動学（重心）
- 第15週 前期範囲のまとめ・解説

後期

- 第1週 前期末試験の解説および解答
- 第2週 数学（微積分応用1）
- 第3週 材料力学（SFDとBMD）
- 第4週 熱流体工学基礎（第一法則）
- 第5週 材料力学（はりの曲げ応力とせん断応力）
- 第6週 材料力学（断面二次モーメントと断面係数）
- 第7週 熱流体工学基礎（理想気体の状態変化）
- 第8週 後期中間試験
- 第9週 中間試験の解説および解答
- 第10週 数学（微積分応用2）
- 第11週 数学（微分方程式）
- 第12週 熱流体工学基礎（単位および流体の性質）
- 第13週 材料力学（たわみ曲線）
- 第14週 熱流体工学基礎（静水力学）
- 第15週 学年末範囲復習

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
機械工学演習（つづき）	平成28年度	民秋・鬼頭・南部・埜	3	通年	履修単位2	必

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 基礎数学（三角関数，指数関数，対数関数，高次方程式・不等式，因数分解，微分，積分，微分方程式）に関連する計算ができる．</p> <p>2. 機械運動学（力およびモーメントのつりあい，重心・分布力）に関連する計算ができる．</p>	<p>3. 材料力学（応力とひずみ，引張りと圧縮，SFD と BMD，断面二次モーメントと断面係数，はりの曲げ応力とせん断応力，たわみ曲線）を理解し，それに関する計算ができる．</p> <p>4. 熱力学（第一法則，理想気体の状態変化）を理解し，それに関する計算ができる．</p> <p>5. 水力学（流体の性質，静水力学）を理解し，それに関する計算ができる．</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>1, 2 学年で習得した数学（三角関数，指数関数，対数関数，高次方程式・不等式，因数分解，微積分）や本年度習得する機械運動学，材料力学，熱流体工学基礎の基本的な演習問題を解き進めていくことにより，「多くの解を暗記する」のではなく，「考え方を身につけること」を目標とする．</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>「知識・能力」1～5の確認を小テスト，前期中間試験，前期末試験，後期中間試験および学年末試験で行う．各試験における配点の比率は，概ね「知識・能力」に記述のとおりとする．合計点の60%の得点で，目標の達成を確認できるレベルの試験を課す．</p>
<p>[注意事項]</p> <p>現象を理解するための数学の重要性，あるいは，数式の背景にある現象および物理的意味を十分に理解することが重要である．</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>本演習は，物理，数学の基礎知識，機械運動学，材料力学，熱流体工学基礎の基本的な考え方を理解していることが望ましい．</p>	
<p>[レポート等]</p> <p>理解度を把握するため，適宜，小テストを行う．</p>	
<p>教科書：なし</p> <p>参考書：各教科において授業で使用した教科書．また，それらに関連する演習書・参考書は図書館に多数蔵書されている．</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>前期中間成績：小テストを40%，前期中間試験を60%として評価する．</p> <p>前期末成績：小テストを40%，前期末試験を60%として評価し，前期中間成績の結果と平均する．</p> <p>後期中間成績：小テストを40%，後期中間試験を60%として評価する．</p> <p>学年末成績：小テストを40%，学年末試験を60%として評価し，後期中間成績の結果と平均する．その平均と前期末成績の平均点とする．</p> <p>また，前期中間，前期末，後期中間および学年末試験については再試験を行わない．</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績の評価方法によって，学業成績で60点以上を取得すること．</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
メカトロニクス	平成28年度	打田正樹・白井達也	3	通年	履修単位2	必

[ 授業の目標 ]

機械系技術者として必要なメカトロニクス技術の基礎知識とその応用法を学ぶ。各要素技術の動作原理や機構の学習を通し、電気系技術者と協働するのに必要な最小限の制御技術に関するセンスも身に付ける。具体的にメカトロニクス技術が採用されている製品や目的の理解を通してメカトロニクス技術の基礎を習得する。

[ 授業の内容 ]

以下の内容は、すべて学習・教育到達目標(B)<専門>に相当する。

( 前期 )

- 第1週 電子機械の概要と役割
- 第2週 機械の機構と運動の伝達(1)
- 第3週 機械の機構と運動の伝達(2)
- 第4週 センサの基礎
- 第5週 センサの種類とその使い方(1)
- 第6週 センサの種類とその使い方(2)
- 第7週 センサの信号処理(1)
- 第8週 中間試験
- 第9週 試験解答・説明
- 第10週 センサの信号処理(2)
- 第11週 アクチュエータの基礎
- 第12週 電気式アクチュエータの種類と動作原理
- 第13週 電気式アクチュエータの活用
- 第14週 自動制御の種類
- 第15週 制御系の基本構成

( 後期 )

- 第16週 試験解答・説明
- 第17週 産業界における自動制御技術
- 第18週 シーケンスと産業用ロボット
- 第19週 エアシリンダと電磁弁の構造と動作原理
- 第20週 電磁リレーの構造と接点
- 第21週 シーケンス制御(1)
- 第22週 シーケンス制御(2)
- 第23週 中間試験
- 第24週 試験解答・説明
- 第25週 コンピュータの発達
- 第26週 マイクロコンピュータの基本動作
- 第27週 主要な命令語の説明
- 第28週 簡単なプログラミング(1)
- 第29週 簡単なプログラミング(2)
- 第30週 メカトロニクス製品の具体例

( 次ページにつづく )



授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
メカトロニクス(つづき)	平成28年度	打田正樹・白井達也	3	通年	履修単位2	必

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>前期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 電子機械の概要と役割について理解できる。</li> <li>2. ねじ、歯車、軸等の機械部品の特徴を理解し、それらを組み合わせた機構と運動の伝達を説明できる。</li> <li>3. 代表的なセンサの動作原理とそれらを用いた計測について説明できる。</li> <li>4. センサの信号処理回路の代表的な物について説明できる。</li> <li>5. 代表的なアクチュエータの動作原理や利用例を説明できる。</li> <li>6. 自動制御の種類、フィードバック制御の概念と構成要素を説明できる。</li> <li>7. 主な制御回路について説明できる。</li> </ol>	<p>後期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>8. 産業用ロボットの仕組みと役割を説明できる。</li> <li>9. シーケンサの仕組みと役割を説明できる。</li> <li>10. エアシリンダと電磁弁の構造と動作原理を説明できる。</li> <li>11. 電磁リレーの構造と動作を説明できる。</li> <li>12. ラダー図を理解し、タイムチャートで動作を説明できる。</li> <li>13. マイクロコンピュータの基本的な構造と動作を説明できる。</li> <li>14. マイコンの簡単なプログラミング(ニモニック)ができる。</li> <li>15. 身近なメカトロニクス製品の詳細な動作手順を説明できる。</li> </ol>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>産業界で使用されているメカトロニクス技術を理解し、その概要を図などと共に記述できるとともに、機械技術者としての基本的な技術用語を理解して記述し、その利用例などを説明出来る。</p>	<p>[達成目標の評価方法]</p> <p>上記の「知識・能力」1～15の確認を、小テスト、報告書、2回の中間試験、2回の定期試験で行う。1～15に関する重みはほぼ同じである。合計点の60%の得点で、目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。</p>
<p>[注意事項] 第1,2学年で学んだコンピュータ関連知識などを理解することが重要である。また、後に学習する「ロボット工学」、 「電子回路」、 「創造工学」、 「制御工学」の基礎となる教科である。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 「機械工学序論」、 「情報処理 I/II」などで学ぶ基礎知識などが必要である。</p>	
<p>[レポート等] 授業内容に関する課題について、報告書を提出することにより評価に加える。</p>	
<p>教科書： 「メカトロニクス入門」 舟橋宏明, 岩附信行 (実教出版)</p> <p>参考書： 「ハンディブック メカトロニクス」 三浦宏文 監修 (実教出版)</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>前期中間・前期末・後期中間・学年末の試験結果を80%、報告書の結果を20%として、それぞれの期間毎に評価し、これらの総合を最終評価とする。ただし、前期中間・前期末・後期中間の評価で60点に達していないものについては再試験を行い、再試験の成績が該当する期間の成績を上回った場合には、60点を上限としてそれぞれの期間の成績を再試験の成績を加味して修正するものとする。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること。ただし、60点以上の学業成績において報告書提出のない時は、59点以下の評価とする。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
材料力学	平成28年度	末次正寛・白木原香織	3	通年	履修単位2	必

[授業のねらい] 材料力学は、機械や構造物が破損しないように、かつ最適に使用できるように材料を選択したり、寸法を定めたりすることを目的とした学問である。授業では、基本的な種々の荷重を受ける物体（弾性体）の変形や物体内に生じる応力の解析手法を学ぶとともに、材料の強さについても理解する。設計の基本と関連して、第3学年においては、棒の引張りと圧縮、はりの曲げについて学習し、自ら問題を解いて深く考える能力を養う。

[授業の内容]

すべての内容は、学習・教育到達目標（B）＜専門＞に対応する。

前期

- 第1週 力学の基礎と応力について
- 第2週 応力とひずみ、フックの法則と弾性係数、ポアソン比
- 第3週 応力 - ひずみ線図、許容応力と安全率
- 第4週 真応力と真ひずみ、伸び率と絞り
- 第5週 棒の引張りと圧縮
- 第6週 引張圧縮の不静定問題
- 第7週 熱応力、応力集中
- 第8週 前期中間試験
- 第9週 はりの種類およびはりのせん断力と曲げモーメント
- 第10週 片持ちはりのせん断力図と曲げモーメント図
- 第11週 両端支持はりのせん断力図と曲げモーメント図
- 第12週 種々のはりのせん断力線図と曲げモーメント線図
- 第13週 荷重とせん断力および曲げモーメントの関係
- 第14週 移動荷重を受けるはり
- 第15週 前期範囲のまとめ・解説

後期

- 第1週 はりの曲げ応力を求める基礎式の導出
- 第2週 横断面の図心、断面一次モーメント、断面二次モーメントおよび断面係数
- 第3週 平行軸の定理、断面二次モーメントの加法（減法）定理、断面二次極モーメント
- 第4週 種々のはり断面の断面二次モーメントと断面係数の導出
- 第5週 はりに発生するせん断応力
- 第6週 種々の断面におけるせん断応力分布
- 第7週 平等強さのはり
- 第8週 後期中間試験
- 第9週 曲げによるはりのたわみを求める基礎式の導出
- 第10週 片持ちはりの曲げによるたわみの具体例
- 第11週 両端支持はりの曲げによるたわみの具体例
- 第12週 面積モーメント法による解法
- 第13週 不静定はりの問題の解法（一端固定・他端支持はり）
- 第14週 不静定はりの問題の解法（両端固定はり）
- 第15週 断面が変化するはりのたわみ、連続はり、組合せはり

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
材料力学（つづき）	平成28年度	末次正寛・白木原香織	3	通年	履修単位2	必

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>前期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 力学の基礎について習熟している。</li> <li>2. 応力とひずみの概念を習得している。</li> <li>3. フックの法則、弾性係数、ポアソン比、許容応力、安全率を理解し、材料の応力-ひずみ線図が説明できる。</li> <li>4. 真応力と真ひずみ、伸び率と絞り率が説明できる。</li> <li>5. 棒に軸力（引張・圧縮力）が作用したときの応力・ひずみ・変位（伸び・縮み）が、不静定問題を含めて算出できる。</li> <li>6. 熱応力を求めることができる。</li> <li>7. 応力集中の概念を修得している。</li> <li>8. はりに働く反力、せん断力、曲げモーメントが計算できる。</li> <li>9. はりの曲げにおけるせん断力線図と曲げモーメント線図を描くことができる。</li> <li>10. 移動荷重を受けるはりのせん断力と曲げモーメントの変化を理解している。</li> </ol>	<p>後期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 種々の断面形状のはりの図心と断面二次モーメント、断面係数が計算できる。</li> <li>2. 平行軸の定理を適用して、断面二次モーメントを求めることができる。</li> <li>3. はりの曲げ応力とせん断応力が計算できる。</li> <li>4. 曲げにより生じるはりのたわみを求める基礎式の導出を理解し、種々の荷重が作用したときのはりのたわみ曲線を求めることができる。</li> <li>5. はりの曲げの不静定問題が計算できる。</li> <li>6. 軸線方向に断面が変化するはりのたわみを求めることができる。</li> <li>7. 3モーメントの式を用いて連続はりの支持点のモーメントを求めたり、組合せはりの各部材に生じる応力を求めるたりすることができる。</li> </ol>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>工業材料の機械的性質と種々の荷重を受ける物体の変形や物体内に生じる応力に関する基礎的事項を理解し、棒の引張りと圧縮、はりの曲げによる変形と応力の計算に必要な専門知識を習得し、機械や構造物を構成する部材の設計に適用できる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」前期：1～10、後期：1～7を網羅した問題を2回の中間試験、2回の定期試験およびレポートで出題し、目標の達成度を評価する。達成度評価における「知識・能力」の重みは概ね均等とする。満点の60%の得点で、目標の達成を評価する。</p>
<p>[注意事項] 材料力学は機械工学における最も重要な基礎科目の一つである。多くの強度上有用な公式が与えられており、学習にあたっては、単にこれらに数値をあてはめて結果を得るのではなく、これらの公式がどのような考え方に基いて得られたか、を自ら導いて確認することが大切である。そして、例題や章末の演習問題を自ら解くように努力すること。本教科は後に学習する材料力学、材料学の基礎となる教科である。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>材料力学は、物理学と数学を用いて説明する学問で、三角関数と初等関数の微分積分と物理学における静力学の基礎を理解しているものとして講義を進める。本教科は機械工学序論の学習が基礎となる教科である。</p>	
<p>[レポート等] 理解を深めるため、随時、演習課題を与える。</p>	
<p>教科書：「材料力学」黒木剛司郎・友田陽 著（森北出版）  参考書：「基礎 材料力学」竹園茂男 著（朝倉書店）、「材料力学要論」ティモシェンコ・ヤング著、前澤成一郎訳（コロナ社）  「材料力学と強度評価の基礎」高橋・清水著（山海堂）他に図書館には問題集を含めて多数ある。</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>試験結果を85%、レポート評価を15%としてそれぞれの期間で評価する。最終成績は4回の評価の平均とする。ただし、2回の中間試験については、提出物を加味した点数が60点未満、かつ試験の点数が平均点の1/2以上の者に再試験を課し、上限を60点として評価する場合がある（無断欠席の者を除く）。2回の期末試験については、再試験を行わない。</p> <p>[単位修得要件] 学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
熱・流体工学基礎	平成 28 年度	藤松孝裕・近藤邦和	3	後期	履修単位 1	必

<p>[ 授業のねらい ]</p> <p>本科目は学科第 4 学年における必須科目である熱力学および水力学の導入部分を学ぶものであり、熱エネルギーの変化や転換および物質の流動現象のように、物理学に基づいている。したがって、式の変化を追跡、理解するだけでなく、式に表される諸量の物理的意味や適応限界を念頭におきながら熱および流体に関する諸現象を理解し、自由に計算できる段階に達することを目的とする。</p>	
<p>[ 授業の内容 ]</p> <p>( 熱力学：藤松 )</p> <p>第 1 週 熱力学の基礎概念および温度と熱            学習・教育到達目標(A) &lt;視野&gt;            学習・教育到達目標(A) &lt;技術者倫理&gt;            学習・教育到達目標(B) &lt;専門&gt;            以降、中間試験までについては、            すべて学習・教育到達目標(B) &lt;専門&gt;に相当する項目である。</p> <p>第 2 週 圧力と仕事</p> <p>第 3 週 熱力学の第一法則およびエネルギー保存則</p> <p>第 4 週 内部エネルギーとエンタルピー</p> <p>第 5 週 理想気体の状態方程式および性質</p> <p>第 6 週 理想気体の状態変化(1)</p> <p>第 7 週 理想気体の状態変化(2)</p> <p>第 8 週 後期中間試験</p>	<p>( 水力学：近藤 )</p> <p>第 9 週 水力学の基礎概念および流体の力学的性質            学習・教育到達目標(A) &lt;視野&gt;            学習・教育到達目標(A) &lt;技術者倫理&gt;            学習・教育到達目標(B) &lt;専門&gt;            以降、学年末試験までについては、            すべて学習・教育到達目標(B) &lt;専門&gt;に相当する項目である。</p> <p>第 10 週 単位と次元、密度と比重、粘性</p> <p>第 11 週 体積弾性係数と圧縮率、表面張力と毛管現象</p> <p>第 12 週 静水力学(圧力の定義と等方性の概念)</p> <p>第 13 週 静水力学(力のつり合い、圧力計)</p> <p>第 14 週 静水力学(圧力計：連結管)</p> <p>第 15 週 学年末試験範囲における演習および解答</p>
<p>[ この授業で習得する「知識・能力」 ]</p> <p>1. 熱力学の第一法則を把握し、それに関する計算ができる。</p> <p>2. 理想気体の状態方程式の定義や比熱の関係式を把握し、それに関する計算ができる。</p> <p>3. 理想気体の状態変化(等圧、等容、等温、断熱、ポリトロップ変化)に関する説明・計算ができる。</p>	<p>4. 単位と次元、流体の性質(密度、比重、圧縮率、粘性、表面張力)についての説明・計算ができる。</p> <p>5. 圧力の定義を把握し、それに関する計算ができる。</p> <p>6. マノメータによる圧力の計算ができる。</p>
<p>[ この授業の達成目標 ]</p> <p>流体の性質や圧力に関する水力学の基礎知識、および熱力学の第一法則や理想気体の状態変化に関する熱力学の基礎知識を習得することにより、学科第 4 学年で学ぶ熱力学や水力学の専門知識に応用できる。</p>	<p>[ 達成目標の評価方法と基準 ]</p> <p>「知識・能力」1~6 の確認を、中間試験および学年末試験で行う。各試験において、合計点の 60% の得点で、目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。</p>
<p>[ 注意事項 ]</p> <p>本科目は後に学ぶ熱力学、水力学、熱工学、流体工学に強く関連する教科である。また、熱力学の範囲においては、自己学習用のノートを授業ノートとは別に作ること。</p>	
<p>[ あらかじめ要求される基礎知識の範囲 ]</p> <p>一般物理、化学、数学などの基礎知識を基礎として、主として工学的立場より、様々な熱機関、エネルギー変換の基礎理論および物質の流動現象を解明していく学問であり、数学の微積分、エネルギー式、運動方程式が土台となる。</p>	
<p>[ レポート等 ] 熱力学の範囲では、理解度を把握するため、毎週、記名式アンケートを実施し、また、自己学習用の課題を与える。</p>	
<p>教科書：機械系教科書シリーズ 11 「工業熱力学」丸茂・木本(コロナ社)            JSME テキストシリーズ「演習 流体力学」日本機械学会編(丸善)            参考書：この種の参考書は、図書館に多く所蔵されている。たとえば、「例題で学ぶ熱力学」平山・荒木共著(丸善)、            学生と技術者のための「水力学問題演習」北川・香川監修(パワー社)</p>	
<p>[ 学業成績の評価方法および評価基準 ]</p> <p>後期中間および学年末試験の平均点で評価する。ただし、後期中間試験においては、再試験を実施するが、対象は、60 点に達しない学生のうち、平均点の 1/2 (あるいは、30 点以上で、低い点数) 以上の点数を保有する者とする。この再試験の成績が中間試験の成績を上回った場合には、60 点を上限として試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。学年末試験の再試験は行わない。</p> <p>[ 単位修得要件 ]</p> <p>学業成績の評価方法によって、60 点以上の評価を受けること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
機械運動学	平成28年度	白木原香織 佐脇 豊	3	通年	履修単位 2	必

[ 授業のねらい ]

機械運動学は、物体の運動とそれをもたらす力の関係を物理学や数学を用いて表現する学問である。基本的な力学の考え方を理解した上で、種々の工業力学に関する問題を自力で解くことができるようにする。

[ 授業の内容 ]

すべての内容は、学習・教育到達目標(B) <専門> に対応する。

前期 (白木原)

- 第1週 質点に働く力の合成と分解
- 第2週 質点に働く力のつりあい・練習問題の解答と解説
- 第3週 剛体に働く力とモーメント
- 第4週 支点と反力
- 第5週 トラス構造1 (節点法と切断法)
- 第6週 トラス構造2 (図式解法)
- 第7週 練習問題の解答と解説
- 第8週 中間試験
- 第9週 中間試験の解説および重心算出の基本概念
- 第10週 物体の重心1 (平板の重心)
- 第11週 物体の重心2 (立体の重心)
- 第12週 物体の重心・練習問題の解答と解説
- 第13週 はりとロープに作用する分布力
- 第14週 摩擦のはたらき
- 第15週 前期範囲のまとめ・解説

後期 (佐脇)

- 第1週 変位, 速度, 加速度の概念と等加速度運動
- 第2週 質点の運動 (放物運動, 円運動など)
- 第3週 ニュートンの運動の法則・運動方程式
- 第4週 ダランベールの原理, 相対運動
- 第5週 求心力と遠心力
- 第6週 摩擦現象の応用
- 第7週 練習問題の解答と解説
- 第8週 中間試験
- 第9週 中間試験の解説および復習
- 第10週 剛体の運動と慣性モーメント
- 第11週 仕事と運動エネルギー
- 第12週 保存力と位置エネルギー
- 第13週 力学的エネルギー保存の法則
- 第14週 運動量と力積
- 第15週 運動量保存の法則と衝突

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
機械運動学(つづき)	平成28年度	白木原香織 佐脇 豊	3	通年	履修単位2	必

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>前期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 力,長さ,時間などの基本的物理量をSI単位で表記できる.</li> <li>2. 質点に働く力の合成と分解により外力を計算できる.</li> <li>3. 力,モーメント,偶力の概念を理解し計算できる.</li> <li>4. 剛体に働く力の合成とつりあいを理解し計算できる.</li> <li>5. 支点到働く反力を理解し計算できる.</li> <li>6. トラス構造を理解し,部材に働く力を計算できる.</li> <li>7. 平板や立体の重心が計算でき,つりあいへ応用できる.</li> <li>8. 物体へ加わる分布力を理解し,変形問題や強度問題へ応用できる.</li> </ol>	<p>後期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>9. 直線運動及び曲線運動に対して変位,速度と加速度の関係を理解し計算できる.</li> <li>10. 相対運動および相対速度の概念を理解して計算できる.</li> <li>11. ニュートンの運動方程式を理解して解くことができる.</li> <li>12. 物体の運動をダランベールの原理で表すことができる.</li> <li>13. 仕事,保存力ならびにエネルギーに関する計算ができる.</li> <li>14. 力学的エネルギー保存の法則に関する計算ができる.</li> <li>15. 運動量と力積の概念を理解することができる.</li> <li>16. 運動量保存の法則と衝突に関する計算ができる.</li> <li>17. 剛体の運動に関する簡単な計算ができる</li> </ol>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>平面内に働く力と,それによって生じる運動を理解し,力学に関する基礎的な重要事項を学習して,身の回りの機械工学に関する問題を解くことができる.</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～17を網羅した問題を2回の中間試験,2回の定期試験およびレポートで出題し,目標の達成度を評価する.達成度評価における各「知識・能力」の重みは同じである.合計点の60%の得点で,目標の達成を確認できるレベルの試験を課す.</p>
<p>[注意事項]</p> <p>数式としてのみの理解ではなく,背景にある現象および物理的意味を十分に理解することが重要である.本教科は後に学習する機械力学,制御工学の基礎となる教科である.</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>本教科の学習には,物理学の力学的基礎知識,初等関数の微分積分,線形代数で学んだベクトルの基礎演算を十分理解していることが必要である.</p>	
<p>[レポート等]</p> <p>各章の演習問題を順次課題として出題する.課せられた演習問題についてはレポートとして提出する.</p>	
<p>教科書:「詳解 工業力学」 入江敏博(理工学社)</p> <p>参考書:工業力学の参考書は,図書館に数多く所蔵されている.</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>前期中間および前期末は試験結果を90%,レポート評価を10%としてそれぞれの期間で評価する.前期末評価は前期中間と前期末の平均とする.後期評価は,後期中間,学年末の2回の試験の平均点を90%以上,レポートの評価を10%以下として合計し,学年末において,前期末評価と後期評価を平均して最終評価とする.前期中間・前期末・後期中間のそれぞれの評価で60点に達していない学生については再試験を行う場合があるが,実施する場合,再試験の成績が該当する期間の成績を上回った際には,60点を上限(レポートとの合計点)としてそれぞれの期間の成績を再試験の成績で置き換えるものとする.学年末試験については再試験を行わない.</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること.</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
機械設計製図	平成28年度	民秋 実	3	通年	履修単位3	必

[ 授業のねらい ]

各人に与えられた設計条件を満足する「円すい摩擦クラッチ」と「玉型弁」を設計して設計書を作成し、作成した設計書をもとに作りたい「モノ」のイメージを具体化して製図を作成する。製図する「図面」は情報伝達の手段であり、規格に基づいて正確に作成されなければならない。そこで、この授業では1, 2年生で学んだ基本的な加工方法、製図の知識を使い、最適な設計が行え、適切な「図面」が「描けて、読めて、話せる」能力を身に付ける。

[ 授業の内容 ]

すべての内容は、学習・教育到達目標(B) <専門> に対応している。

前期

序論・基礎となる知識

第1週 設計の意味, 設計者の心得, 設計の順序, 製図規格

円すい摩擦クラッチの設計

第2週 軸径の決定

第3週 各部寸法の決定

第4週 キーの決定

円すい摩擦クラッチ設計書の作成

第5週 設計書の書き方

第6週 設計書の作成

第7週 設計書の提出

第8週 前期中間試験

円すい摩擦クラッチ製図の作成

第9週 円すい摩擦クラッチ製図の作成

第10週 円すい摩擦クラッチ製図の検図

第11週 円すい摩擦クラッチ製図の提出

玉形弁の設計

第12週 弁部寸法の決定

第13週 弁棒の決定

第14週 各部寸法の決定

第15週 計算書の提出

後期

玉型弁設計書の作成

第1週 設計書の書き方

第2週 設計書の作成1

第3週 設計書の作成2

第4週 設計書の提出

玉型弁製図の作成

第5週 玉型弁製図の作成1

第6週 玉型弁製図の作成2

第7週 後期中間試験

第8週 玉型弁製図の作成3

第9週 玉型弁製図の作成4

第10週 玉型弁製図の検図

第11週 玉型弁製図の提出

第12週 CADの基礎と概要: 基本操作とコマンドの説明

第13週 CADによる作図法の演習1

第14週 CADによる作図法の演習2

第15週 CADによる作図法の演習3

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
機械設計製図(つづき)	平成28年度	民秋 実	3	通年	履修単位3	必

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 図面の名称, 大きさ, 様式について説明できる.</p> <p>2. 図面の尺度, 線, 文字について説明できる.</p> <p>3. 図形の表し方について説明できる.</p> <p>4. 寸法の表し方について説明できる.</p> <p>5. 表面粗さの定義と表示について説明できる.</p> <p>6. はめあいの意味と適用について説明できる.</p> <p>7. 標準数の性質と使い方について説明できる</p>	<p>8. 伝動軸の設計, 製図ができる.</p> <p>9. キーの強度計算が行える.</p> <p>10. 円すい摩擦クラッチの設計が行える.</p> <p>11. 円すい摩擦クラッチの製図が行える.</p> <p>12. 玉形弁の設計が行える.</p> <p>13. 玉形弁の製図が行える</p> <p>14. CAD による基本的な製図が行える</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>機械の設計・製図に必要な基本的な知識を習得し, 設計条件に応じた最適な設計, 製図規則に適應した適切な図面の作成を行うことができる</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～14を, 設計書・製図の内容および口頭試問の結果により評価する. 評価に対する「知識・能力」の各項目の重みは概ね均等とするが, 基本的な製図規則は多く用いられるので, 必然的に重みが大きくなる. 満点の60%の得点で, 目標の達成を確認する</p>
<p>[注意事項] 提出期限は厳守すること. 本教科は第4, 5学年で学習する機械設計製図と強く関連する教科である.</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 本教科は第1, 2学年で学んだ機械設計製図の学習が基礎となる教科である. 第1, 2学年で学んだ製図の基礎知識・加工方法は十分に理解しているものとして講義を進める.</p>	
<p>[レポート等] 計算書, 設計書(A4レポート用紙), 製図(A2セクションペーパー)を提出する.</p>	
<p>教科書: 「JISによる実用的な設計製図法」 茨城大学工学部製図研究会(理工図書)</p> <p>参考書: 「機械製図」 林 洋次(実教出版)</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>計算書を全体評価の10%, 設計書を全体評価の20%, 円すい摩擦クラッチの製図を全体評価の30%, 玉型弁の製図を全体評価の30%, CADによる製図を全体評価の10%として評価する. なお, 提出期限の遅れは減点の対象となるので遅れないこと.</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前期中間試験まで: 円すい摩擦クラッチ計算書(5%). 円すい摩擦クラッチ設計書(10%)</li> <li>・前期末試験まで: 円すい摩擦クラッチ製図(30%). 玉型弁計算書(5%)</li> <li>・後期中間試験まで: 玉型弁設計書(10%)</li> <li>・学年末試験まで: 玉型弁製図(30%), CADによる製図(10%)</li> </ul> <p>[単位修得要件]</p> <p>全ての計算書, 設計書, 製図を提出し, 学業成績で60点以上を取得すること.</p>	



授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
情報処理応用	平成28年度	白井 達也	3	前期	履修単位1	選

<p>[授業のねらい]</p> <p>機械系エンジニアにとって、対象の数式モデル化とデータ解析は非常に重要な能力である。近年はコンピュータの能力向上に伴い、数値解析手法は身近な問題解決手段の一つとなった。反面、パッケージ化された解析ソフトウェアの結果を正しく活用するには数値解析の原理と限界について熟知している必要がある。本授業では数値解析の考え方と基礎技術を理論と演習を通して習得する。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>第2週から第15週までの内容はすべて、学習・教育到達目標(B) &lt;基礎&gt; に対応する。</p> <p>第1週 数値解析の原理と適用可能な領域と限界について 学習・教育到達目標(A) &lt;視野&gt; &lt;技術者倫理&gt;</p> <p>第2週 方程式の近似解(2分法, ニュートン法)</p> <p>第3週 プログラミング演習(方程式の近似解)</p> <p>第4週 連立1次方程式の解法(1) 行列の基本的な計算</p> <p>第5週 プログラミング演習(行列の基本的な計算)</p>	<p>第6週 連立1次方程式の解法(2) ガウス・ジョルダン法</p> <p>第7週 プログラミング演習(ガウス・ジョルダン法)</p> <p>第8週 中間試験</p> <p>第9週 中間試験の解説</p> <p>第10週 曲線のあてはめ(最小2乗法)</p> <p>第11週 プログラミング演習(最小2乗法)</p> <p>第12週 数値積分(台形公式)</p> <p>第13週 プログラミング演習(数値積分)</p> <p>第14週 微分方程式(オイラー法, ルンゲ・クッタ法)</p> <p>第15週 プログラミング演習(微分方程式)</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>序論</p> <p>1. プログラミングでどのような問題が解決でき、どのような問題は解決できないかを理解している。</p> <p>2. 解決する問題の種類によってツール(表計算ソフトウェアを用いるか, プログラミング言語を用いるか)を選択できる。代表的な数値解析アルゴリズムの説明と演習</p> <p>3. 2分法, ニュートン法のアルゴリズムを理解し, 与えられた方程式の近似解を求めるプログラムを作成できる。</p>	<p>4. 連立一次方程式を行列で表現ができる。</p> <p>5. 行列の基本的な演算をプログラミングできる。</p> <p>6. 掃き出し法を用いて連立一次方程式の解を得られる。</p> <p>7. ガウス・ジョルダン法を用いて逆行列を求められる。</p> <p>8. 最小2乗法により連立方程式の係数推定ができる。</p> <p>9. 台形公式のアルゴリズムを理解し, 定積分の数値解を求められる。</p> <p>10. オイラー法, ルンゲ・クッタ法の内容を理解し, 微分方程式の数値解を求められる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>数値解析に関する基礎理論を理解し, 数々の数値解析テクニックを習得し, 具体的な物理現象の解析に応用できる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>数値解析に関する「知識・能力」1~10の確認を演習課題(プログラム作成)および中間試験, 期末試験で行う。1~10に関する重みは同じである。合計点の60%の得点で, 目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。</p>
<p>[注意事項] プログラミング言語はProcessingを用いる。講義資料の提供および課題の提出はMoodleで行う。 本教科は後に学習する「計算機援用工学」, 「情報学基礎論(専攻科)」, 「卒業研究」の基礎となる教科である。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 本教科は「情報処理 / 」の学習が基礎となる教科である。特に第2学年で学んだプログラミングの基礎を理解できていること。</p>	
<p>[レポート等] 授業中に解説したアルゴリズムの確認として, 演習課題プログラムを作成し, 動作を確認の上, 提出する。</p>	
<p>教科書: 「Cによる数値計算法入門」堀之内 総一, 酒井 幸吉, 榎園 茂(森北出版)</p> <p>参考書: 「数値計算入門」森本義広 (啓学出版)</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>前期中間, 前期末試験の2回の試験の平均点を全体評価の80%とする。ただし, 中間試験において60点に達していない場合には, それを補うための補講に参加し, 再試験により該当する試験の成績を上回った場合には60点を上限として評価する。残りの20%については提出された演習課題プログラムにより評価する。</p>	
<p>[単位修得要件] 学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電気工学概論	平成28年度	打田 正樹	3	前期	履修単位1	選

[ 授業のねらい ]

電気工学は電気技術に応用される電気現象や、電気に関する基礎的な理論や計測技術などを学習するものである。直流回路や電磁気学に関する基本的問題を自力で解決し、電気工学に興味を持てるような基礎知識を得る。

[ 授業の内容 ]

全ての内容は学習・教育到達目標(B) <専門> に対応する

第1週 電子と電流、導体、不導体、半導体

第2週 電位・電圧・起電力・直流と交流、電気回路・オームの法則

第3週 導体の抵抗、抵抗率

第4週 電圧降下、直並列回路

第5週 応用回路

第6週 キルヒホッフの法則

第7週 重ねあわせの定理

第8週 中間試験

第9週 電力と電力量

第10週 ジュールの法則

第11週 電池

第12週 電流と磁気

第13週 磁気回路と磁気抵抗

第14週 コイルとその役割

第15週 コンデンサとその役割

[ この授業で習得する「知識・能力」 ]

1. オームの法則を用いて直流回路に関する計算ができる

2. 合成抵抗、電圧降下、電流の分流を理解して計算ができる。

3. キルヒホッフ、重ねあわせの定理で回路の電流計算ができる。

4. 電力、電力量、ジュール熱について説明および計算ができる。

5. 代表的な電池の原理、構造を説明できる。

6. 電流による磁界、磁気抵抗について説明および計算ができる。

7. コイルについて説明および計算ができる。

8. コンデンサについて説明および計算ができる。

[ この授業の達成目標 ]

電気回路、電磁気学に必要な基本用語、語句、法則を理解し、それらに関する計算ができる。

[ 達成目標の評価方法と基準 ]

上記の「知識・能力」1～8を網羅した問題を1回の中間試験、1回の前期末試験、小テストで出題し、目標の達成度を評価する。達成度評価における各「知識・能力」の重みは概ね均等とする。合計点の60%の得点で、目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。

[ 注意事項 ] 電気を取り扱うのに必要な基本用語、語句、法則を理解するために、各自演習問題を含めよく復習すること。また、後の電子回路、ロボット工学などの基礎となる教科である。

[ あらかじめ要求される基礎知識の範囲 ] 第1,2学年での「物理」および「化学」の学習が基礎となる教科である。

[ レポート等 ] 内容ごとに小テストを実施する。

教科書：「絵ときでわかる電気理論」高橋 寛 他 (オーム社)

参考書：「始めて学ぶ電気理論の考え方・解き方」永田博義 (オーム社)

[ 学業成績の評価方法および評価基準 ]

中間、期末2回の試験の平均点を80%、小テストの得点を20%として評価する。ただし、中間試験の評価で60点に達していない者には再試験を課し、再試験の成績が中間試験の成績を上回った場合には、60点を上限として中間試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。

[ 単位修得要件 ]

学業成績で60点以上を取得すること。

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
ロボットデザイン論	平成28年度	白井 達也	3	前期	履修単位1	選

[授業のねらい]

ロボット技術 (RT: Robot Technology) を用いたメカトロニクス製品の設計, 次世代サービスの提案を行う上で知っておくべきロボット工学の基礎知識をエンジニアリングデザインの視点から解説する。さらに実社会で RT を活用する上で知っておくべき安全に関する知識を学ぶ。

[授業の内容]

第2週から第13週までの内容はすべて, 学習・教育到達目標 (B) <基礎> に対応する。第1, 14, 15週の内容は学習・教育到達目標 (A) <視野> <技術者倫理> に対応する。

- 第1週 ロボット研究開発史
- 第2週 さまざまなロボット (産業用)
- 第3週 さまざまなロボット (ヒューマノイド)
- 第4週 さまざまなロボット (家庭用, サービスロボット)
- 第5週 さまざまなロボット (医療福祉, その他)

- 第6週 ロボットの構成要素, ロボットの得意と苦手
- 第7週 ロボットを実際に使ってみる (実演)
- 第8週 中間試験
- 第9週 ロボットを動かすのに必要なコントローラー
- 第10週 マイコンボードの製作
- 第11週 マイコンボードのプログラミング
- 第12週 今後のロボットテクノロジーの進展
- 第13週 生産技術の基礎 (実演)
- 第14週 実社会への RT の活用による未来と予想される問題点
- 第15週 製作したプログラムの発表

[この授業で習得する「知識・能力」]

1. 過去から現代までのロボット研究の歴史を理解している。
2. 産業用から医療福祉その他のさまざまなロボットの種類と, それを実現したロボット技術について理解している。
3. ロボットを構成する要素 (機械, 電気, 情報) の概略を正しく理解している。
4. 現時点のロボットが実現できていること, 苦手としていることを正しく理解している。

5. ロボットを制御するとは, 利用するとは, 現実的には何をを行うことなのかを理解している。
6. ロボットを制御するのに用いるコントローラーに必要なとされる機能が何かを理解している。
7. ごく基礎的なマイコンボードの仕組みを理解し, 最低限のプログラミングテクニックを修得している。
8. 今後のロボット技術の進展に向けての課題を理解している。
9. FA (自動生産技術) の基礎を理解している。

[この授業の達成目標]

現時点における RT の現状と今後の進展について理解すると同時に, RT を実際に使って問題を解決するにはどのような知識を身に付ける必要があるのかを理解する。

[達成目標の評価方法と基準]

RT に関する「知識・能力」1～9の確認を中間試験, 期末試験およびレポートとプレゼンテーションにより評価する。1～9に関する重みは同じである。合計点の60%の得点で, 目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。

[注意事項] 教材としてワンチップマイコン (IchigoJam プリント基板キット: 1,500円税込) を購入して用いる。

本教材は後に学習する「基礎メカトロニクス」, 「実践メカトロニクス」の基礎となる教科である。

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 全学科の学生を対象とする科目であるため, 機械工学, 電気・電子工学, 情報工学の専門的な知識は必要としない。ただし, 本教材は「情報処理 / 」の学習が基礎となる教科であるのでプログラミングの概念は理解していることが前提である。

[レポート等] マイコンボードを使ったプログラムと, その仕様書および取扱説明書を提出物とする。

教科書: eラーニングコンテンツ

参考書: 「メカトロニクス入門」(舟橋宏明, 岩附信行: 実教出版)

[学業成績の評価方法および評価基準]

前期中間, 前期末試験の2回の試験の平均点を全体評価の80%とする。ただし, 中間試験において60点に達していない場合には, それを補うための補講に参加し, 再試験により該当する試験の成績を上回った場合には60点を上限として評価する。残りの20%については提出されたレポート (プログラムと仕様書および取扱説明書) により評価する。

[単位修得要件] 学業成績で60点以上を取得すること。

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
インターンシップ	平成28年度	各学年担任	1~3	通年	履修単位1	選

[授業のねらい] 社会との密接な接触を通じて、技術者として必要な資質と実践的技術感覚を体得する。	
<p>[授業の内容]</p> <p>内容は、学習・教育到達目標(B)〈専門〉に対応する。 次のインターンシップ機関(以下、実習機関)、内容および期間で実務上の問題点と課題を体験し、日報、報告書、発表資料を作成し、発表を行う。</p> <p>【実習機関】</p> <p>高専機構が案内する海外・国内インターンシップのほか、学生の指導が担当可能な企業または公共団体の機関で教務委員会を経て校長が認めた機関への実習とする。</p>	<p>【内容】第1学年から第3学年の学生が従事できる実務のうち、インターンシップの目的にふさわしい業務</p> <p>【期間】授業に支障のない夏季休業中等の実働5日以上</p> <p>【日報】毎日、日報を作成すること。</p> <p>【課題】インターンシップ終了後に、報告書を作成し提出すること。</p> <p>【発表】インターンシップ発表会を開催するので、発表資料を作成し、発表準備を行うこと。</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 技術者として必要な資質が分かり、それらを体得できる。 2. 実践的技術感覚が分かり、それらを体得できる。 3. 体得したことを日報にまとめることができる。</p>	<p>4. 体得したことを報告書にまとめることができる。 5. 体得したことを発表資料にすることができる。 6. 体得したことを発表し、質疑応答することができる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>社会との密接な接触を通じて、技術者として必要な資質と実践的技術感覚を体得し、それらを日報や報告書にまとめ、それらをもとに、発表資料を作成し、それを伝えられる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識能力」1~6の習得具合を勤務状況、勤務態度、日報、報告書および発表の項目を総合して評価する。評価に対する「知識・能力」の各項目の重みは同じである。</p>
<p>[注意事項] インターンシップの内容は、第1学年から第3学年の学生が従事できる実務のうち、インターンシップの目的にふさわしい業務であること。実習機関の規則を厳守すること。評定書等を最終日に受け取ったら、担任に提出すること。インターンシップの手引き、筆記用具、メモ帳(手帳)、日報、実習先から指定されている物、評定書を持参すること。なお、本インターンシップにおける取得単位は、第1学年から第3学年を通じて、最大1単位とする。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 心得(時間の厳守(10分前集合)、挨拶、お礼など)</p>	
<p>[レポート等] 日報は、毎日、作成し、報告書も作成し、実習指導責任者の検印を受けて、インターンシップ終了後に、担任に提出すること。発表会用に発表資料および発表の準備をすること。</p>	
<p>教科書：特になし。 参考書：インターンシップの手引き</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準] 「インターンシップの成績評価基準」に定められた配点に従って、勤務状況、勤務態度、日報、報告書および発表により成績を評価する。</p>	
<p>[単位修得要件] 総合評価で「可」以上を取得すること。</p>	